

# ふれあいの祭典 兵庫短歌祭

## 淡路市立サンシ ヤインホールにて



### 第198号

題字 出口 草 露  
発行者 〒679-5322 佐用郡佐用町上石井685 安藤直彦  
兵庫県歌人クラブ  
会 計 〒657-0043 神戸市灘区大石東町4-3-1-305 福島妙子  
振替 01110-5-6903  
印刷所 ㈱ 甲南堂印刷

ふれあいの祭典 - 兵庫短歌祭



石屋恵比須舞奉賛会の皆さまによる恵比須舞

文部科学大臣賞  
藤本 朋世さん (西宮市)  
ジュニア部門兵庫県知事賞  
横治 美玖さん (兵庫県立大学 附属中学校)

力強い太鼓の音に合わせて石屋恵比須舞奉賛会の皆さんによる「恵比須舞」のオープニング。朱色の衣装をまとった恵比須さんの、滑稽な仕草に会場からはたびたび拍手がおこった。続いて門康彦淡路市長の「淡路島を題材とする和歌は少なくとも六百首ある

ふれあいの祭典・県民文化普及事業「兵庫短歌祭」が11月18日(土)午後1時から、淡路市立サンシヤインホールで開催された。入賞者の表彰式作品の総評に続き、「講演 淡路島和歌の路」が行われた。予報通り雨も午後には上がり島内はもちろん、明石海峡大橋を渡り参加された中高生やその親や兄弟姉妹、会員、一般の方々が多参加された。



門康彦淡路市長より受賞の藤本朋世氏

とされている。本日の兵庫短歌祭と淡路島が和歌の魅力を発信する一助となればうれしい。」との開会の挨拶。続いて大谷武徳県芸術文化協会業務執行理事が「ふれあいの祭典は今年で29回目を迎えるが身近な場所でも芸術文化に触れていた機会を提供している。日本の心を伝える短歌を通じ交流を深めてもらいたい。」と話された。

次に安藤直彦歌人クラブ代表が「千三百年前からの言葉の調べによる言葉の伝達が短歌という形で残っているということ。老若世代を超えてひとつのものを共有できることが地域の活性化の一助となることを願っている。短歌は単に習いごとというのではなく、ひろい視野から自分自身を発見し、人とのつながりを自覚するものである。」と述べられた。

受賞者が自分の歌を晴れやかに大きな声で披露して盛んな拍手を受けた。この喜びを心に刻み中高生たちが短歌をこれからの生活に取り入れてくれればと願う。



応募短歌の批評をする清水昭男氏

(講演の詳しい内容は2〜4面に記載)

講演者は尾崎まゆみ氏が担当。桂保子、中川昭各氏。ジュニアの部は鈴木美樹、遠藤和子各氏。その後の講演は影山尚之、武庫川女子大学文学部教授による「淡路島和歌の路」。淡路島、特に北淡の和歌の歌碑、瀬戸内海を船で旅する時に詠まれた歌などについて解りやすく解説された。淡路市実行委員会副会長新皇昭久氏の閉会の辞の後、午後四時三十分終了。参加者160名。(山田恵子)



ユーモアを交えて話す影山尚之氏

# 講演『淡路島和歌の路』

武庫川女子大学文学部教授

## 影山尚之

本日のお話の主旨は、短歌・和歌と淡路島がそもそも縁が深く、「これからも仲良くしましょうよ」ということです。お手元の資料に基づき、要点を説明いたしますので、お聞きいただけたらありがたいと思います。また、淡路市には歌碑のいくつかが整備されており、それらを訪ねる観光のきっかけになればと願っています。

### ●万葉集羈旅(きりよ)の歌における淡路島

万葉集巻三・三八九に長歌と反歌による「羈旅の歌一首」があります。羈旅とは旅のこと。この文字を見てみますと「馬」が入っているように、本来は馬による旅、陸を行く旅のことですが、やがて船を用いた海路の旅も指すようになっていきます。なお、近い距離、日帰りの出張であっても旅と言うことも可能ですが、万葉集で羈旅と言う場合は、概ね畿外に出ていく遠距離の旅を意味します。まず反歌をみてく

ださい。  
・島伝ひ 敏馬(みぬめ)の崎を  
漕ぎ廻(み)れば 大和恋しく 鶴  
(たづ)さはに鳴く

この「敏馬の崎」は、神戸市灘区岩屋の敏馬神社の辺りのことで、遠い畿外からの旅で懐かしい大和が近づいてきたという状況がみてとれます。また長歌では「海神(わたつみ)は、くすしきものか 淡路島」と詠い出されていますが、ここに船旅の恐怖を味わい尽くしてきた作者の感慨がこめられて

います。明石海峡は、夕方になるとくに満潮時は東に向かって猛烈に潮が流れます。「夕されば 潮を満たしめ 明けされば 潮を干(か)れしむ 潮さみの 波を恐(かしこ)み 淡路島磯隠(いそかく)り居て」は、このことを示しています。旅の終りに最大の難所がたちふさがっているわけですからここに淡路島の立地、当時の船旅の実情がいきいきと伝わってきます。ちなみに、古代の日本人にとって最も重要な地点であった難波は、瀬戸内海の東の端に位置し、その西側に淡路島が大きく横たわり狭い明石海峡をつくっています。日本書紀には、「方(まさ)に難波の碇(みさき)に到る時に、奔潮(はやなみ)有りて太(はなは)だ急(はや)きに会ふ。因りて浪速(なみはや)の国と為(い)ふ」と、地名の由来が書かれています。

また、古事記上巻「国生み条」では大八島国誕生の順番を「淡路島↓四国↓隠岐島↓九州↓壹岐↓対馬↓佐渡島↓本州」と記しているように、国生みの神話の起点を淡路島に据え、大陸の方へ向かっていく確かな視点があります。

### ●和歌における地名列挙の意味

柿本人麻呂の淡路島に関連した羈旅の歌を三首あげます。

- ・三津の崎 波を恐(かしこ)み 隠(こも)り江の(以下判読不可)
- ・玉藻刈る 敏馬を過ぎて 夏草の野島の崎に 舟近付きぬ

結社(グループ)	会場	内容	問い合わせ先
芦屋水襲短歌会	芦屋市民会館	第2土曜、午後1時半	0797(31)7220 藤井 幸子
	谷崎潤一郎記念館	第4金曜、午後1時半	
新月芦屋支部	西宮北口生活消費センター5F	第3土曜、午後1時	078(733)8569 西村 郁
玲瓏関西歌会	プレラにしのみや(西宮市)	2/4、5/13、10/6、午後1時	0798(52)7448 小林 幹也
宝塚白珠の会	宝塚東公民館(宝塚市)	第3火曜、午後1時	072(794)0614 星野 敏江
心の花兵庫歌会	アステ6階 市民プラザ(川西市)	奇数月第1土曜、午後2時	072(794)3083 足立 晶子
明石大門歌会	明石市立勤労福祉会館	第1土曜、午後1時	078(781)0846 森嶋 郁子

・淡路の 野島の崎の 浜風に 妹が  
結びし 紐吹き返す

最初の歌の下旬は判読できないので、激しい潮の流れが恐ろしいので隠れているといった状況が詠われています。まんなかの歌も明石海峡の激しい風と波を背景にしています。最後の歌も激しい風に妻が結んでくれた紐が吹き返しているという状況が詠われています。なお、まんなかの歌は枕詞を外すと短い歌、つまりスピード感のある歌であり、これは波に乗って渡ってくる風のスピード感と重なっています。

次に万葉集巻四・五〇九の長歌と反歌による「丹比真人笠麻呂筑紫国に下る時に作る歌一首を見てみます。ここでは旅の途中で通過していく地名が列挙されていますが、これは歌の一つの技法です。言いかえれば、地名は歌の中で最も重要なものの一つです。単なる無機質な地名ではなく、そこが作者にとつて意味をもつもの、ある種の感情を喚起する大切な言葉なのです。この歌では「三津の浜辺」「葛城山」「鄙の国辺」「淡路」「粟島」「稲日つま」「家の島」が列挙されています。これらの地名は作者に次のような連想をもたらすからです。「淡路↓逢ふ」「粟島(あはしま) ↓逢ふ」「稲日つま↓妻」「家の島↓妻の住む家」。通過する地名はいくらでもあるのに、それらを省いてこれらの故郷や妻を思い起こさせる地名だけを歌にもつてきているのです。

し引き延ばしたような長歌で、二日にわたる感慨をうたっています。注目すべきは、第一日目では、「鏡なす三津」「直向かふ敏馬」「我妹子に淡路の島」「我が心明石」と、地名に儀礼として枕詞を冠しているのに対して、故郷と遠く離れた第二日目では地名に枕詞を冠していないことです。ここでの枕詞は「鏡なす三津」が実際はそうではないのにあえて穏やかな海面を表すように、プラス指向の枕詞と言えます。なお、次のように地名「淡路」から「あはれ」を連想する例もあります。

・住吉の 岸に向かへる 淡路島 あはれと君を 言はぬ日はなし  
(万葉集巻十二・三二九七)

●本州側から遠望する淡路島

淡路と和歌との結びつきは、非常に古くて深いものです。万葉集中に「淡路」「淡路島」「野島」「松帆の海」など、淡路を詠んだ和歌は二十七首あり、これはかなりの数です。ただし、先程ご紹介した羈旅の歌の作者のように、淡路に立ち到つて作つたものではありません。つまり、本州側から遠望した淡路島が詠われているのです。

・こぬ人を まつほの浦の 夕なぎに やくやもしほの 身もこがれつつ  
この歌は定家の作品。自ら編纂した小倉百人一首にも入れた自信作ですが、その本歌となつたものが、「名寸隅(なきすみ)の 舟瀬ゆ見ゆる 淡路島 松帆の浦に 朝なぎに 玉藻刈りつつ (以下略)」という万葉集巻六・九三五の

長歌です。  
また、万葉集巻九・一七四〇の「水江の浦の島子を詠む一首」の長歌は、丹後が本場とも言われる浦島伝説と殆ど同じストーリーですが、舞台は大阪の住吉で、永遠のいのちの世界、常世国(蓬莱山)を想像させる基盤として沖合の淡路島があつたと言えます。なお、浦島太郎という言い方は室町時代以降でそれ以前の文献に出てくるのは「浦の島子」、もちろん男の名前です。

●淡路島と和歌との結びつき

紀貫之が書いた古今和歌集仮名序に「やまと歌は、人ひとのころをたねとして、よろづのこのの葉とぞなれりける。…(中略)この歌、天地のひらけはじまりける時より、出で来にけり。「天の浮橋の下にて、女神、男神と成りたまへることを言へる歌なり」という一節があります。つまり、天地ができたときから歌はあつたという強引な説であり、「内は後で書き加えられたものだそうす。しかしながら、古事記にあるように、伊耶那美命が先に「あなにやし、えをとこを」と言い、後に伊耶那岐命が「あなにやし、えをとこを」と応えて結婚し、国生みにいたつたという神話を念頭においていたことは明らかです。「あなにやし、えをとこを」「あなにやし、えをとこを」、五音で歌のリズムがあるではないかという事です。これまで見てきたように「淡路」は妻や恋人と「遭ふ」という連想を生み、浦の島子の歌は常世で

結社(グループ)	会場	内容	問い合わせ先
明石短歌会	明石公園会議室	第1金曜、第3火曜	078(936)3306 牧野 秀子
水甕明石支社	神戸医療生活協同組合生協会館	第1土曜、午後2時	078(991)0155 池本 俊六
東浦短歌会	東浦老人福祉センター(淡路市)	第2木曜、午後1時半	0799(74)2141 片山 田佳子
千鳥短歌会	松帆活性化センター(南あわじ市)	第1土曜、午後1時半	0799(42)2062 山田 恵子
ひだまり歌会	大阪市立総合学習センター	第2火曜、午後1時	0797(84)8881 桂 保子
COOP(短歌を楽しむ)	コープカルチャー西神南	第1土曜、午後1時	
青山短歌グループ	立花公民館(尼崎市)	第2木曜、午後1時	06(6429)5158 たなかみち



講演を終えた影山氏に拍手で御礼を!

女性と「遭ふ」という想像がある。淡路は結婚とか恋愛に縁が深い土地とされていますが、これは、この古事記の神話から一つの線ですながつてみるとみているのではと思います。

●歌枕としての淡路

奈良時代の役人は実際に旅をして任地に赴いていましたが、平安半ば以降旅の機会がぐんと減っています。とくに地位の高い要人は、都にいたまま国司を務めることが多くなり、都と地方との往還は殆どなくなることになりました。とはいえ、和歌においては地名を詠みこむということがむしろ盛んとなり、実際は旅をしないが旅の歌を詠むということが行われます。これを歌枕

と言います。

・淡路島 かよふ千鳥の 鳴く声に  
いく夜寝覚めぬ 須磨の関守

これは小倉百人一首に選ばれた源兼昌の歌ですが、もともとは「関路千鳥」といへることをよめる」との前詞があるように、題詠の作品です。抒情の焦点を淡路島でなく千鳥にあてて寝覚めの悲しさを詠ったものですが、江戸時代の国学者契沖は源氏物語の須磨の巻の以下の歌の本歌取りではないかと主張しています。

・友千鳥もろ声に鳴くあかつきはひとり寝覚めの床もたのもし

しかし、須磨や瀬戸内海をわたる千鳥を詠んだ歌は多くあります。とくに千鳥は海辺の景物として固定され、冬の寒々しい情景を表すものとして定着していったと言えます。

●新古今和歌集の「淡路」

ところで、須磨と淡路島を行き来する千鳥の姿は、本当は見えないはずですが、しかし、須磨、淡路は代表的な歌枕の囁目であり、そこに「通ふ千鳥」を配する和歌の優美で知的な手法によって、一幅の絵画を実現しています。これが新古今の和歌なのです。

・春といへば 霞みにけりな きのふまで 波間に見えし 淡路島山

(俊恵)

立春となり、にわか霞んで淡路島山が見えないということはありません。しかし、このように見立てて、おぼろげな風景を描くのが新古今の作者たち

の約束事なのです。

・秋ふかき 淡路の島の ありあけにかたぶく月を おくる浦風

万葉集では「淡路」は実際に旅をしたその地名から妻や家族にやつと「逢ふ」という連想を喚起するものでした。ところが平安以降の和歌には、その発想は継承されません。沖合を通行して西に下る経験がないので、この引用歌のように、むしろ遠い所おぼろに霞んではつきりわからない所、そこに月や霞を配して幻想的な光景、幽玄の世界を表現するようになっていきます。同じ淡路を尊重して詠うのだけれど、意味付けが違っているわけです。

さて、淡路市内には、本日ご紹介した和歌も含めて、八か所に歌碑が建立されています。資料に歌碑に刻まれた和歌と建立場所を記していますので、ご確認ください。

古代の和歌における地名というのは、単に無機質なものでなく、人の心、詠んだ人の心をゆさぶるようなもの、なんらかの心情を喚起するようなものでした。このことを皆様にお伝えしたつもりです。どうぞこれを踏まえて、歌碑をお訪ねいただければと思います。

※紙面の都合で、長歌などの全文、歌碑の詳細をご紹介できませんでしたが、詳しくお知りになりたい方は、講演当日の参考資料がございますので、左記までお問合せください。

〒662-0932  
西宮市泉町一―二七〇八

藤本朋世(記録)

結社(グループ)	会場	内容	問い合わせ先
林間阪神支社	中央公民館(尼崎市)	第2金曜、午後1時	06(6411)6516 内井 幸子
海市短歌会	神戸市婦人会館(中央区)	第4日曜、午後1時	078(371)0239 中川 昭
神戸白珠の会	六甲道勤労市民センター	第2水曜、午後1時	078(881)1578 小谷 博泰
波濤神戸	保田ひで宅(長田区)	毎月中旬	078(612)9294 保田 ひで
ポトナム短歌会(須磨歌会)	兵庫勤労市民センター(兵庫駅前)	第4日曜、午後1時半	079(557)0679 中西 健治
万華鏡	神戸市勤労会館	第4月曜、午後1時半	078(242)1493 黒崎由起子
未来・神戸トアロード歌会	神戸市勤労会館	第1火曜、午後1時	078(792)9057 河村 公美



思ひ出の人々

楠田立身

県歌人クラブ創立六十年に寄せて

・佐藤重美、八谷正亡く野瀬昭二とわ  
れのみとなりぬ訪問の宴  
・総評系、同盟系、公務員、歌論風発  
せりきへ金盃  
・博覧強記の八谷正が創刊時の「象」  
の荒地を耕したりき  
・『乾燥季』は難解ですと言ひし我に  
終生優しかりし倉地与年子は

受贈歌誌・会報等

「白珠」月刊 安田純生  
「白圭」隔月刊 内海永子  
「とべら」月刊 尼子勝義  
「山の辺」月刊 高 蘭子  
「花鏡」季刊 石橋妙子  
「鮎」月刊 島崎榮一  
「コスモス姫路」  
コスモス短歌会姫路支部  
「茅花」季刊 前田昭子  
「象」季刊 楠田立身  
「海市」季刊 中川 昭  
「夢」月刊 山根晴正  
「波濤神戸」 保田ひで  
「文学圏」月刊 下村千里・浮田伸子  
「幻桃」隔月刊 幻桃短歌会 棚橋好江  
「薫風」月刊 平井恭治・長谷川正  
「津布良」季刊 兎田孝子  
「旅笛」季刊 角倉羊子  
「綱手」月刊 井上美地  
「但丹歌人」隔月刊 尾形 貢

・生日がともに四月二十三日、励まし  
賜ひき頼田島二郎  
・長江利昭の『淡路の短歌』は島に生  
れ、果てし愛着と人柄の高著  
・初井しづ枝のハガキ一葉自らの瘦身  
のごと織き水茎  
・結婚祝の寄せ書きの早野臺氣の句  
へ自轉車は風に抗ふ機械

・秘蔵せる斎藤史の初版『魚歌』は冬  
木三左に賜びし年玉  
・古稀過ぎて岡部文夫に入門せし稲村  
幸子 はわがもう一人の師

「ひめじ水甕」隔月刊

「六甲」月刊 小畑庸子・生田よしえ  
「磯」隔月刊 志方弘子・田岡弘子  
「丹生」隔月刊 竹村公作  
「五月風」 兼貞靖行  
「すばる」 藤井幸子  
「すばる」 すばる川柳会  
「石川県歌人」石川県歌人協会陶山弘一  
「詩と連句 おたくさ」 おたくさの会  
「時の川柳」月刊 時の川柳社  
「印南野文華」 印南野半どんの会  
「どるふいん」 どんふいん短歌同好会  
『年刊歌集』第63集 京都歌人協会  
『年刊歌集』第40集 西宮歌人協会  
『きのくに』52集 和歌山県歌人クラブ  
・「鶯が城便り」足立勝歳・埼玉歌人・  
「大阪歌人クラブ」・「京都歌人協会会  
報」・「短歌 堺」・「長野県歌人連盟報」  
「会報」西宮歌人協会・「和歌山県歌人  
クラブ会報」・「大分県歌人クラブ」・「会  
報」姫路歌人クラブ・「風」日本歌人ク  
ラブ・「栞葉」栞葉出版・「兵庫県現代  
詩協会会報」

結社(グループ)	会 場	内 容	問い合わせ先
檀 の 会	神戸市勤労会館	2/3、9/1、午後1時	078(991)3073 尾崎まゆみ
潮音神戸歌会	神戸市勤労会館	第1土曜、午後1時	078(441)3740 石橋 妙子
花鏡木曜教室	三宮サンケアホーム	第2木曜、午後1時	
花 潮 会		第3火曜、午後1時	
K C C 舞子短歌教室	K C C 舞子(垂水区)	第3水曜、午後1時	
揖西短歌会	揖西公民館(たつの市)	第4金曜、午前10時	0791(66)2186 菅野 仁孜
「白圭」龍野歌会	たつの市生きがいセンター	第4月曜、午前10時	0791(63)4734 内海 永子
赤穂短歌の会	赤穂市民会館	第4土曜、午後1時半	0791(48)0137 尼子 勝義
佐用姫短歌会	西山会館(佐用町)	第2火曜、午後1時半	0790(82)3019 衣笠 邦恵
銀の道短歌会	生野メインホール(朝来市)	第3火曜、午後1時	079(672)2334 中島眞喜子
さくら木短歌会	枚田岡会館(朝来市)	第3日曜、午後1時半	
姫路水甕歌会	姫路市民会館 指導 小畑 庸子	第3土曜、午後1時	079(232)4003 生田よしえ
香寺短歌会	姫路市香寺公民館	第2水曜、午後1時	
コスモス藍の会	姫路市民会館	第2土曜、午後1時	079(448)0895 久米川孝子
コスモス姫路	姫路市民会館	第3日曜、午後1時	079(269)0513 飯田 進

# ふれあいの祭典 兵庫短歌祭

## 入賞作品評

### 文部科学大臣賞

藤本 朋世 (西宮市)

・ 鯛のこ糸透きとほる里のそら問はれてをりぬ墓じま心の是非

「墓じま心」という言葉は今日、何とも刺激的な謂いである。大方の辞書にはまだなく、いつしかに、特に団塊といわれる世代で町住みの者にとつて切実な実感を伴ったことばである。先祖代々の墓の維持には相当の難儀がある。そこには自分自身の墓をどうあるかといった問題も重なってくる。歌中の「問はれてをりぬ」の主語は今日の社会にあつて、でもあり、自分自身の身の上において、でもあろう。「鯛のこ糸」はその里の永い無言の歩みを暗示してもいよう。生前に自分たちの墓を既に作っている人、墓は要らない、海か山か空かに撒いといてという人もある。管理しきれない墓をあずかつて供養する業者もあるようだ。墓石を碎いて埋め立てたりもするようだ。この歌はこうした今日の「死生観」にもつながつた課題を背景に、作品化を遂げている。(安藤直彦)

### 兵庫県知事賞

鈴木 裕子 (高砂市)

・ 春風の匂いも一緒に送るからメールではなく手紙にしよう

先ずは知事賞おめでとうございます。

私も選ばせて頂いた一首です。まことにシンプルなお歌ですが、「メールではなく」など、どこかに現代の風潮に逆らう意思を伴いながら相手に心を寄せる情緒のただよつた作品である。歌には哲学とか思想を伴う重い歌も必要であるが、必ずしもそうとはいえない。この歌のように日常の微細かつ単純な事柄をも「詩」として掬い上げ、成立させることも大事である。この歌に命を吹き込んだのは初句と結句である。(土居 正)

### 兵庫県議会議長賞

野田 巧子 (神戸市)

・ 黙秘権行使すれども三日目の空の青さについ返事する

初句から「黙秘権行使」という短歌的な表現とは離れた言葉で読者をひきつける。おそろくちよつとした夫婦のトラブルが尾を引いてへもう口をきかないと作者は思っている。けれど三日目ともなると平常心も戻り、疲労感が増してくる。何と言つてもよい展開は真つ青な空だろう。夫の呼ぶ声に思わず、いつもの返事をする。「つい」が効いていて、夫婦の阿吽の呼吸が楽しくたわわれている。「空の青さ」がさわやかな印象を残す一首である。(足立昌子)

### 兵庫県教育委員会賞

山本みさよ (神戸市)

・ 髭を剃りネクタイ結べば父の顔消えて男の月曜の朝

休日の心身共に安らいだ「私のお父さん」と親しみを込めて呼びかけたくなるような父親像を象徴的に「父の顔」と表現した。おそろく年若い作者ではなからうか。それが一転、上の句の具体によつて「男の顔」となる月曜の朝は、きりつと緊張感があり、頼もしくはあるがどこか寄りがたい。内と外、仕事を待つ壮年男性の二面性を平易な表現で一首にした。結句「月曜の朝」としたところ、行き届いている。この一首、広く一般化できる内容をもっている。(青田綾子)



野田巧子氏

### 兵庫県芸術文化協会賞

牧野 秀子 (明石市)

・ 窓越しに見る夜の海この涯を難民の舟は漂ひゆくか

窓から見る夜の海はただ漆黒、月もなく星もみえぬ今宵、そして舟かげも

ない。この海の彼方にイメージしたのは貨物船でもなく、大漁船でもない。まして豪華客船でもなかった。ただひたすら命をかけて脱出する難民たちの舟であった。今も世界中で民族紛争の絶えない現実。この国の平和な日常から世界に開かれた作者の眼を思う。(保田ひで)

### 淡路市長賞

郡 英子 (加古川市)

・ 風を読み漁ひとすぢに生き来しと語る漁師の百歳の腕

ある地方では科学の発達していない時代に漁師が生み出した風の呼び名が、三十四通りあつたと聞く。漁師にとつて風を読むことが、どれほど重要だつたかと言ふことであろう。作者は経験に裏打ちされた智慧で漁一筋に生きてきたという漁師の独白を重く受け止めている。そして過ぎし日々々の具体として百歳の男の腕を読者に提示する。我々はその腕をたぐりよせ、漁に生きる男の全身像を思い浮かべる。日に焼けて老いた漁師の顔を、そして遠くへと伸ばされた眼差しを。(黒崎由起子)

### 淡路市議会議長賞

鈴木 美樹 (高砂市)

・ 何もかも上手くいかない日もあつたたとえば信号せんぶ赤とか

思いどおりに運べない。もどかしい。おまけに信号までも赤。そんな日もあつた。誰もがよく経験する。この日常を歯切れよく詠まれた作者。とても共感する歌だ。上の句を読むと作者の深刻さ

は如何にと思いきや、下の句でなんだ高が信号だったのかと妙に安心し、納得してしまふ。「たとえば信号ぜんぶ赤とか」の洒落た表現も効いている。上の句からこの下の句への転換がどこかユーモアを誘う。このような歌にめぐり合うと心がなごみほつとする。

(島田英樹)

淡路市教育委員会賞

山田 文(姫路市)

・一つ一つの重さのほどに雨粒はふぞろいの輪を水面に広ぐ  
写実にはまず、よく見ることこそが肝要・・・とは誰しも思うことだが、それが中々できない。漠然と、或いは既成概念に従って、いわば他人が今まで見てきた眼鏡を以って見てしまふ。掲出歌は、しっかりと自分の目で雨を見た。普通は「雨が降っている」と漠然と捉えるところを、「一粒一粒の雨を見た。一つ一つの雨粒はそれぞれに己の重さを持つゆえに落ちていく水面に描くそれぞれの水輪はふぞろいに広がる。雨粒一つ一つの命が立ち上がってくるではないか。」

(益永典子)

兵庫短歌祭淡路市実行委員会賞

蝉 正敏(大阪府)

・徹夜した街灯たちが俯きてぼつりぼつりと仕事を終える  
一晩中街をてらしていた街灯たちの灯が消えていく明け方のシーンが詠まれている。一斉にはなくぼつりぼつりと消えていく情景が目につかぬ。灯が消えることを「仕事を終える」と表

は如何にと思いきや、下の句でなんだ高が信号だったのかと妙に安心し、納得してしまふ。「たとえば信号ぜんぶ赤とか」の洒落た表現も効いている。上の句からこの下の句への転換がどこかユーモアを誘う。このような歌にめぐり合うと心がなごみほつとする。



左:蝉正敏氏、右:福井恭子氏

現したことで夜を徹して街を照らすという大切な役割を果たしている街灯への労いや謝意が感じられ意味の深い味わい深い作品である。街灯を擬人化したことで無機質の物体に生命や感情が与えられ詩情のある作品となっている。

(松田辰子)

神戸新聞社賞

福井 恭子(姫路市)

・ひんやりと静かに開いたエレベーターわたし一人を地下へと運ぶ  
今日ではエレベーターは日常のものとなつているがこの歌の中では非日常への入口のような感がある。作者は何の必要があつて地下へと降りてゆくのだろうか。詠み出しから見ても楽しい所へは向つていないような気がする。

読者にもそれが伝わる詠み口で作者は意図的ではないかも知れないがある種の寂寥感で誘ってくる。技巧をこらすというのでもなく一首を正統的に詠み下している。ミステリアスな物語がはじまりそうな魅力的な一首で注目した。

(矢内温代)

兵庫県歌人クラブ賞

濱 守(朝来市)

・宵闇を押し広げつつ夕顔の蕾くつきり開ききりたり  
夏の暮れ、月が出るまでの闇。その闇は強い力で広げられながら、またその中を夕顔の蕾が闇の輪郭を際立たせ、白い花を開き切つたと。「押し広げつつ」と力強く広げる様を、「くつきり」と花の輪郭を鮮明にし、「開ききり」と完全に開き切つたと、「たり」と言いきることにより強い余韻となる。「くつきり」が繋ぎとなり、結句まで進む。「くつきり」、「開ききり」、「たり」と同じ音の遣い方も有効。闇の黒、夕顔の白が互いに強烈な明暗。印画紙を見るような情景が印象深い。

(清水昭男)

入選(6人)

伊藤 悦子(加西市)

・病廊でちひさな嘘をひとつつき着替へ持ち行く五階の個室  
西垣 春枝(養父市)

・谷間のわが家に冬の日脚のび居間の敷居を二つも跨ぐ  
伊藤 敦子(明石市)

・猫独り待ちあるからと宴席の隣りの友が夜道を帰る

西村 節子(三田市)  
・ひもじきに大根一本抜き盗りしわれが少女の昭和の戦時  
政野 哲子(篠山市)  
・冬の鬱一喝するよな春の陽を布団に集め子の帰り待つ  
長谷川たつ子(明石市)

・夏草の茂る川辺に虫取りの網と麦わら帽子が走る

佳作(20名)

石飛俊郎(加古川市)、三津野幸代(神戸市)、大西弘子(姫路市)、谷川貞子(大阪府)、福田とみ子(姫路市)、三浦克之(豊岡市)、若林久子(神戸市)、福島妙子(神戸市)、大鐘稔彦(南あわじ市)、内海永子(たつの市)、渡辺啓子(神戸市)、青田綾子(神崎郡)、後藤千明(加西市)、大栗陽子(南あわじ市)、前谷節子(南あわじ市)、船曳みゆき(佐用郡)、増井定子(神戸市)、加藤直美(西宮市)、上田知子(高砂市)、時里直子(加西市)

「受賞しました」

☆藍綬褒章受賞

平成29年5月16日

小畑庸子

☆半どんの会文化賞受賞

平成29年7月16日

土居 正

☆日本短歌雑誌連盟優良歌誌賞受賞

平成29年11月23日

「象」楠田立身

# ジュニア部門入賞入選作品選評

尾崎まゆみ

本年度のジュニア部門参加校は、中学三十一校、高校八校。応募総数六五五首。集まった短歌は、柔らかな感性と豊かな想像力に満ちていて、家族との暮らしや、学校生活の充実が見えてくる歌も多かった。なによりも嬉しかったのは、言葉で状況や心情を現す楽しさが伝わってきたこと。選からもれた歌のなかの、きらきらと輝く言葉たちも忘れがたい。先生方のご指導に感謝申し上げます。

## 兵庫県知事賞

兵庫県立大学附属中学校

横治 美玖

・金魚鉢ゆらゆら揺れる朱の尾ひれ大きく見せて小さく見せて

金魚鉢の中を金魚が泳いでいる。「ゆらゆら」揺れを表すオノマトペと大きく、小さく」の対比。「見せて」のリフレイン。その三つの手法を使って、「朱の尾ひれ」をゆらゆらと見せて泳ぐ金魚と、じっと見ている私を、穏やかな時間の流れが包む。

## 兵庫県議会議長賞

加古川市立神吉中学校

佐竹葵有良

・進みゆく川の流れて乗れぬままゆれる笹舟私と同じ  
川の流れて乗れないで引つかかったまま揺れている笹舟に、私の今の状態



左から横治、吉田、中山さん

を重ねる。私も踏み出せないまま揺れているので、笹舟の様子に共感する。自分の状態を客観的に見る眼が育っているのだ。川の流れる先に、希望が感じられるところも良い。

## 兵庫県教育委員会賞

神戸市立吉田中学校

伊地知拓美

・手と足で練る踏む伸ばす切るゆがく  
思い出うどん野活記念日  
手と足を使い、いろいろな動きをしてうどんを作る。「練る、踏む、伸ばす、切る、ゆがく」と動詞を連ねて動きで魅せる。そのスピード感が心地よ

い。締めは「野活記念日」。俵万智のベストセラー「サラダ記念日」が重なり、初々しさにわくわくする。

## 兵庫県芸術文化協会賞

柳学園中学校

吉田 彩乃

・散歩から帰った猫の肉球の熱さで分かる今日の温度は  
日課の散歩から帰つてくると近寄つてきてあいさつする猫。甘えてくる猫の肉球を触るとその日の温度がわかるのだ。小さな猫のさらに小さな一部分ぶにゆぶにゆの肉球に焦点を合わせて皮膚の感じる熱に注目する。身体感覚を活かした歌は素敵。

## 淡路市長賞

神戸市立白川台中学校

目下 まい

・仏壇に一番大きな柿を置き祖母を見る祖父柿より赤い  
仏壇に柿を供えて祈る祖父の姿を、孫が見ている。柿より赤い祖父の顔に、祖母への愛を感じたのだろう。愛へのちよつとくすぐつたい思いが、新鮮。

## 淡路市議会議長賞

淡路市立北淡中学校

中山 弥咲

・新しい一ページ目はきれいな字今日からよろしく私のノート  
まささらのノートの一ページ目にはきれいな字を書くつもり。その緊張感と期待感が「今日からよろしく」にぎゅつと閉じ込められている。

## 淡路市教育委員会賞

姫路市立豊富中学校

徳留 日菜

・目覚ましが必要で音を鳴らしてもかなわないよな母さんの声  
目覚まし時計が「必死」に鳴つても、朝はなかなか目が覚めない。すると目覚ましの音より大きい母さんの声。何気ない日常の幸せな一コマ。「必死」が効いている。

## 兵庫短歌祭淡路市実行委員会賞

宝塚市立宝塚中学校

小室 凜

・草むしりその手で顔をこすつたらそこに広がる大草原は  
草をむしって、草の匂いが残っている手で顔をこすると、青臭い匂いが鼻腔に広がる。草の匂いから大草原を連想する、ダイナミックな展開が魅力的。

## 神戸新聞社賞

日ノ本学園高等学校

三木 舞花

・大空はいろんな顔をするんだよふつと見た時笑っていたよ  
空は刻々と変化する。そこにいろいろな顔が見えるという発想が素敵。その表情は見る人の気持ちによって違ふはず、楽しいときは空も笑うのだ。呼びかけの「よ」が楽しい。

## 兵庫歌人クラブ賞(3名)

宝塚市立宝塚中学校

平尾明香利

・あこがれのみこの衣装を身にまとい



思わず私くると回る  
 神社の巫女の衣裳だろう。あこがれていた白い着物と赤い袴を着る喜びが弾けて、思わずくると回った私。楽しい歌に品格をもたらす「身にまよつ」が眩しい。

神戸市立神港橋高等学校  
 寺岡 健太

・足下の先を行く影追いかけた琥珀に染まる夕暮れを背に

夕暮れ時の空は微妙に変化する。その中に現れた琥珀色を背に受けて、自分の影を追いかけた私は、琥珀に閉じ込められた標本のように。イメージの重なりが、歌に深みを与えている。

篠山市立篠山中学校  
 多根 ほか

・綿菓子にくるまれた棒とわからない世界がくるむ私に似ている  
 綿菓子の棒と、私が似ている。私探しの私ではなく、まわりの「わからない世界」に注目したところと、守られているような温かさが良い。

入選(9名)

加東市立東条中学校 岸本実乃梨

・「君の名は？」かわいい子にだけ聞きに行くナンパ上手な弟八歳

神戸市立神港橋高等学校 山口 桜花

・根の深い雑草魂見習えと教えてくれる夏の草引き

三木市立志染中学校 北村 莉菜

・夏休み思い出した祖父のことビニールハウスのトマトの匂い



自分の歌を披露する入選の中・高生

加古川市立神吉中学校 峯畑 大愛

・しかられた反論できず黙り込むの代わりにギターで叫ぶ

加東市立滝野中学校 中山 歩足

・あと少し4分休符までもうちよつと酸素不足で音が出せない

兵庫教育大学附属中学校 西野 由羅

・曾祖父の遺影を見上げ終戦日南の空へ思いをはせる

三木市立三木中学校 網中 瑠生

・部屋のすみ共にすごしたスパイクとたすきを見ると走りたくなる

兵庫県立佐用高等学校 小久保亜美

・髪洗う抱えきれないこの想い泡と一緒に流してしまえ

兵庫県立山崎高等学校 村田 愛莉

・暑い夏日焼け止めなど意味がない私はすでにおでんの卵

佳作(39名)  
 篠山市立篠山中学校 中尾 菜月  
 淡路市立北淡中学校 徳田 百香  
 加古川市立神吉中学校 川原 千穂  
 兵庫県立篠山産業高等学校 井尻優希乃  
 相生市立矢野川中学校 勝谷 麻衣

- 加東市立東条中学校 藤原 弘樹
- 神戸市立神港橋高等学校 中野 風香
- 篠山市立篠山中学校 山下 朋花
- 加古川市立神吉中学校 中島 大智
- 加古川市立神吉中学校 高橋 柚衣
- 武庫川女子大附属高等学校 糠野 葵
- 三木市立自由が丘中学校 吉田 信恒
- 伊丹市立南中学校 渡海 輝
- 加東市立滝野中学校 島田 温大
- 加東市立滝野中学校 松田 侑子
- 兵庫県立立神北高等学校 永正 萌奈
- 三木市立三木中学校 本岡 夕季
- 兵庫県立神戶北高等学校 大野 輝
- 淡路市立岩屋中学校 竹代 優心
- 淡路市立岩屋中学校 山市 佳史
- 高砂市立竜山中学校 寺園 潤花
- 姫路市立香寺中学校 横山 博香
- 多可町立中町中学校 松本 真奈
- 西宮市立苦楽園中学校 前田 瀬里
- 姫路市立城乾中学校 泉 奈那
- 播磨町立播磨中学校 宮折 哲平
- 三木市立緑が丘中学校 浅和 樹
- 三木市立緑が丘中学校 今村 美悠
- 神戸第一高等学校 山谷 葉月
- 神戸第一高等学校 中谷 綾乃
- 神戸第一高等学校 八十 優希
- 丹波市立山南中学校 上田 太紀
- 宍粟市立波賀中学校 池垣 愛来
- 三田市立藍中学校 中野 陽斗
- 三田市立藍中学校 榎野 七菜
- 兵庫県立山崎高等学校 藤本ゆうか
- 日ノ本学園高等学校 山田 陽南
- 淡路市立岩屋中学校 八代谷丈涼
- 親和女子高等学校 矢野日南子
- (参加校) 39校
- (中学校31校・高等学校8校) 655首

結社(グループ)	会場	内容	問い合わせ先
塔 姫 路 歌 会	城南公民館(姫路市)	第2日曜、午後1時	0791(62)3538 藤原 明朗
ポ ト ナ ム 姫 路	姫路市民会館	第3月曜	079(266)3603 糴川 範子
文 学 圏 社	姫路花の北市民広場(姫路市)	月初めの午後	078(961)5676 浮田 伸子
かしの木短歌会	加西市コミュニティセンター	第2日曜、午後1時	0790(47)0403 志方 弘子
コ ス モ ス 加 西	中央公民館(加西市)	第2木曜、午後1時	0790(42)0415 藤岡 成子
	アステシア(加西市)	第2金曜、午後1時	
白 珠 加 東 支 社	滝野公民館(加東市)	第2水曜、午前	0795(48)3679 片山 洋子

「第9回歌集批評会記」

新屋修一

平成29年7月29日  
(於) 兵庫勤労市民センター

34度、真夏日にもかかわらず45名が出席。活気ある批評会であった。

今回は、南輝子歌集『WAR IS OVER』と西橋美保歌集『うほの空』が取り上げられ、レポーターは楠誓英氏と廣庭由利子氏、司会は小林幹也氏が担当した。

先ず南歌集への楠氏評。身体を通した、言葉・歌い方。戦争で亡くした父を含め、全ての父なるものへの挽歌で

ある。次はどういう文体で詠んでゆくのか興味深い。

会場からは、悲しみに合う情景を選んでいるなどの意見が出された。

・はちぐわつは青空ばかり青空の底踏みぬいてもまたもや青空

・歳月やジャワ・ジャカルタの虐殺をひとに語りてさらにへだたる

次に西橋歌集への廣庭氏評。文語と口語がうまく使い分けられている。文語は、身を構えた力の入った詠み方。

口語は、思いをそのまま吐き出すように詠っている。動的な強い歌のなかにわずかに静・弱の歌を入れた構成も良い。

会場からは、読者を巻き込んでゆく修辞の力があるなどの意見があった。

・このひとですこの眼で見ましたこの人が夢でわたしを殺したんです

・身をよちり鱗を散らす龍を見き春いつせいに桜散るころ

総評として、「死」が共通するテーマ。どちらもリフレインを効果的に使っている。南歌集は折り・再生のイメージ。字余りの破調が不思議なリズムを醸し出している。西橋歌集は、怨恨のようなイメージ。テクニカルで、アイロニーがある。

最後に作者二人から、感謝と今後の作歌への抱負が述べられ、盛況のうちに終了した。

『島のうた人』

淡路歌人クラブ

代表・事務局 清水昭男

島の南海岸部に咲く水仙で春を迎え、初夏はハマボウの黄、秋は西海岸の夕陽が眩しい。カーネーションなどの花卉栽培も盛んで、彩りのある温暖で、少雨の島である。

御食国として王権に海や山の幸を献上した食材の島で、今は玉葱、天然鱧は知名度が高い。

近年、鉄器工房や銅鐸が発見され、昨年、「古事記の冒頭」を飾る国生みの島として日本遺産に認定された。

王権にとって瀬戸内の要衝の地であると同時に都人の流刑の地となり悲哀も伝えられる。対岸の難波津にて遙かに霞む島に思いを馳せたのだろう。

万葉集などに島の風情を詠んだ和歌も多い。海人の生業や暮しの歌である。海に囲まれた島の一体感ならではの伝統や文化として引き継がれている。海の民として交易や海運に長じた水軍や豪商も生まれた。

昭和から平成にかけて、二つの海峡に橋が架かり、輸送手段は船から車に替わった。船の待ち時間を気にすることはなく、阪神間がグッと近くなり、若者は都会へ向かった。そ

して戻ることとはなかった。今、高齢化と担い手不足は深刻で、農・漁業の衰退に拍車が懸る。従って島のうた人も同じ轍を踏む。当クラブ会員は八十名(十月現在)八グループと個人で構成し、全淡路歌祭(七月中旬)、ふれあい短歌教室(十月)、文学作品展(十一月)年刊歌集発行(年度末)を事業とする。

窓辺から海が望められ、潮の香りと潮騒が日常である。先人が支えた短歌界、「島のうた人」の一角に居ることに感謝する日々である。本機会を与えて頂いた皆様にも…。

結社(グループ)	会場	内容	問い合わせ先
小野短歌会	コミュニティセンターおの(小野市)	第1日曜、午後	0794(62)2846 松尾 鹿次
下東条短歌教室	コミュニティセンター下東条(小野市)	第4日曜、午後	
東条短歌会	東条公民館(加東市)	第2日曜、午後	
美加志保巨勢教室	巨勢教室(加東市東古瀬)	第3日曜、午後	0795(37)0680 岸本しげ子
コスモス葛の花	八千代プラザ(多可町八千代区)	第2水曜、午後1時	
茅花短歌会	ふれあい交流館(稲美町)	第2水曜、午前9時半	079(492)1766 前田 昭子
東加古川短歌会	加古川総合文化センター(加古川市)	第2金曜、午後1時	079(293)0956 水野 美子
てのひら	NPO法人てのひら(高砂市)	第1土曜、午後	079(442)2476 石原 智秋

平成二十八年年度

兵庫短歌賞応募作品評

はじめに

安藤 直彦

本年度の応募総数は四十三編、二十代から九十代まで、各世代に渡って例年を大きく上回ったのご応募をいただいた。「兵庫短歌賞」「新人賞」「奨励賞」「受賞作品」については六月の「会報」に掲載済み。ここでは惜しくも賞に漏れた作品を紹介し、選考委員の各評を参考にされ、次回に期して頂きたく願う次第。よき作品は生を強むるという、お互いにそうした作品を共有し合いながらさらに存在意義大きい超結社の兵庫県歌人クラブでありたく思う。

自分独自の表現を模索せよ

小林 幹也

藤本美智子

「波音」

・現より一步こころの内がわを歩いていたり寂しい日には  
・水に映る木木のあいだの空ふかくたゆたいている時間がありぬ  
・自然との交感から、わずかに揺らぎゆく自分の心的確に描いている。読むごとに味わい深い歌群だった。もう一步踏み込んで、自分独自の表現を模索してい  
たら、評価はさらに上がっていたことだろう。

「老いの日淡々」

畑 登代子

・夜半の雨置き残したる蒼き空が不意の訃報に大きくゆがみぬ  
・ダビデのごとき尻を持つ子に席譲らるる夫の匂い 三周忌来る  
一読、短歌をつくり慣れた人の歌だと思った。問の取り方がうまいから、字余りがさほど気にならない。時間の流れをゆっくりと噛み締めるような品のよさもある。「ダビデ」などの固有名詞も効果的に用いられている。

「癌病んで」

桂 日呂志

・死に近かき娘に添寝をしてをれば夏の病棟夜蟬の啼きぬ  
・家族みな癌病棟の屋上集ひて夏の星座を仰ぐ  
既に桂氏は三年前の、加古川での兵庫短歌祭において「末期癌病める娘の脈とりて添ひ寝せし夜の馬追ひの声」の歌により(公財)兵庫県芸術文化協会賞を受賞されている。同じテーマを掘り下げてゆくのもいいが、ともすれば類歌になっ  
てしまっているのが惜しまれる。

「四季によせし」

白井てる子

・日が照れば雲影山にうつろいで夏のおわりのさみしさをもち  
・ガラス窓また暮れやらぬ日は美し色とりどりの書籍が並ぶ

白井氏は兵庫短歌賞応募者の常連であり、私は二年前の「遊歩」にも注目した。「馬鈴薯は土持ち上げて芽ぶき居り其の葉は日毎緑の園に」の一首は今でも忘れがたい。今回も叙景歌がよかった。景色にうまく思いが込められている。

「冬の中」

吉田千代美

・ガラス戸を通る冬日に背を丸め母は牛蒡を削っていたり  
・冬空の高きに光る柚子あまた一尺の雪とけし朝に  
・牛蒡「柚子」という具体的な表現がいきている。丹念に写真していく詠み方に好感が持てた。一方で軽く詠み流したような歌があったのが残念だった。

心の選択を慎重に

楠田 立身

「ちやんぷん」

小畑 恵子

・退陣を二十六万人がせまりたり 私はいつでも長姉をやめる  
・大島は夫の形見か男柄きりきり朱の帯まぶし  
素材もよく佳吟だが「…か」と疑問を投げかける形が三首続く。また「ほつ」「きりきりきりり」などオノマトペが多用されていることも耳障りだった。二十首という短い連作では気をつけたい。

「夢」

森元 満子

・西空を茜に染めて沈み行く夕日の如く夫は去り逝く  
・薄ら日に繋ぐ命のいとおしく煩惱具足かけ行く八十路  
今生きて在ることへの感謝の念と未来の夢への着想は尊いが「明日なき運命」「無情なる波乱」「募る哀愁」「苦難の旅路」など常套語が多く情緒過剰であった。  
「老いの繰り」

岡本 絹江

・予科練の七つ釘の亡弟のいま在る如く笑顔ゆめ見る  
・想うこと素直になれずに氣を痛めて九十老婆の悩みはつきず  
九十歳の方のよう応募に敬服する。体調が優れないから懐古的な作品が多かったが前向きにまた挑戦してほしい。  
「エキスポ」

朝倉 恵子

・門前に座る飼い猫姿勢よし道ゆくわれを見定めるごと  
・常日頃離れず付かず媚売らぬ人とのつきあい猫に教わる  
素材が多彩で詠法も自在だが「漬かる」「包い」「泌みる」など誤字や漢字の妥  
当でない使用が散見された。  
以上拙評を試みた。二十首では至難なことと思うが連作というより自信作の群  
作を並べた作品が多く残念であった。また作歌意欲旺盛なためか饒舌だった。言  
葉を抑制しセールスポイントの目立たぬ作品を期待したい。

己を表出

三津野 幸代

谷畑 恵山

小田部桂子

性は既に一定のレベルを超えていて、大いに注目している作者だろう。置いてきぼりのゴムの樹、虫喰いの穴、限りなく孤独の深さを思わせる。

「空はまだ青」

・今の医師あなた癌ですよ平然と患者の気もち少しは気づかなくてパソコンの画面を見詰めたまま平然と癌を告げる医師。患者への気遣いは微塵も感じられない。作者の悲鳴と怒りが伝わってくる。現代医療への批判歌。

・畦道の踏まれても尚凛と咲く草花強し我れ見習いたし

・抗癌剤の副作用に苦しみながら、食後の服用を守る為三度の食事を規則正しく摂る日常の二十首。草花に光を見出した。前向きな姿勢に拍手を送る。

「不安の暗示」

宮崎 浩

・酷評で傷つくことをしるゆゑに歌会にせず。空はまだ青

・歌会は自分を客観視出来るよい機会である。傷つくことを恐れないで欲しい。

・「空はまだ青」の結句の転換が良く希望も窺える。

・樹海にはただよふ魂があることはニュースにならず冬は来るなり

・行方不明で片付けられている沢山の死者の魂が漂っている樹海。やがて容赦なく厳しい冬が訪れる。樹海の魂へ思いを馳せ情感豊かな人間愛に満ちた一連。

「平家物語をよむ」

塩見 俊郎

・二位の尼幼帝を抱き浪の下にも都ありと壇ノ浦の藻屑と散りぬ

・幼帝と同年の一年生は同行するも観覧車に乗る

・表題は「平家物語をよむ」。一連二十首は『平家物語』のダイジェスト版と言

つて良いだろう。内容の紹介に終わらずに作者の思いを籠めて詠まれたら又違った味が出たのではと思う。掲出歌は壇ノ浦に没した幼帝と同年の孫(多分)を詠

み現代つ子との対比に魅かれた。

「確かな光」

山下恵理子

・それぞれに抱つる痛み知りながら見ぬふりをする闇は深まる

・夫婦間の微妙な氣息が窺えて巧み。思いやりや労りがそこはかと無く表出されている。四句と五句の間を一字空けにすると結句の思いがより深くなる。

・「合奏よ」 幼稚園までの道のりのかばんの響音ママの靴音

・朝、幼稚園までの道のりは楽しいひと時。子供の鞆にカタカタと鳴る箸の音。作者のヒールの音。まるで「合奏」と捉えたところがお手柄。発見がある。

レベル超え

中川 昭

渡辺 啓子

・父母は施設へ移りマンションに置いてきぼりの居間のゴムの樹

・柿落葉をつづく見つけ虫喰いのまあるい穴を絵手紙にする

・老いゆく両親を思ふ一連は殊の外胸に刺さる。淡々とした表現を貫く乾いた感

性は既に一定のレベルを超えていて、大いに注目している作者だろう。置いてきぼりのゴムの樹、虫喰いの穴、限りなく孤独の深さを思わせる。

「空はまだ青」

・遠き地を知る人もなし傷負ひて病む子とともに追ひつめらるる

・「あなた方は所詮よそ者、これ以上はむづかしいでせう」校長の言ふ

いじめとヘイトスピーチは同根である。悪であるとは認識しつつも、校長でさえそれを救うことができない。作者の怒りが強いほど、言葉がリアルではあるが、そのぶん感情が流れた嫌いは否めない。明るいつも未来はあると信ずる。

「日々」

長谷川喜世子

・新年に 俳句 短歌と披露する 老人会の 親しき仲間

・真田旅 ドラマと会わせ 考える 壮大な寺 重圧な墓

・かなりの高齢者と思われるが、歌の応募はうれしいことだ。歌はまず字あきをしないよう心がけたい。推敲も大事なひとつ。「会わせ」は「合わせ」だ。

「光」

真砂 晃美

・傷ひとつあらぬ硝子に守られて新しきビルタペ華やぐ

・橙の光こぼる窓の外に老い立ち止まる従容として

・歌に手練れた方の作品群で「光」をテーマとしているが、多分に心象的詠風だ。しかし歌のテンポと語り口が速くて余情に欠ける点が惜しまれる。それにしても「老い立ち止まる従容として」は秀眉の収めとしてわたしの心に残る。

歌は心の楽器、事情説明の器ではない

桂 保子

・風圧を流す車体を拭きあぐる恍惚として男の仕事

・うす暗きドライブウエーのトンネルにライトの芯を刺して飛び込む

・「V8・シマ」の一連の序歌としての一首目は作者像を立たしめて成功している。「風圧を流す車体」が巧い。二首目は「芯」の一語が効いて緊まった臨場感を伝えている。義姉の訃を受けての一連、読みごたえがあったが、時に事情説明のための歌、埋草めく歌が混じったのが惜しい。歌はやはり一首独立。

・仕分けせし朝昼晩の飲み薬残して夫は弥生旅立つ

・「お願いね」口癖だった夫の声を願ひしやこえ甦える

・「おこぼ坂」は御夫君を看病する日ごと逝去、そしてその後の心の揺れをテーマにした時系列の一連でその悲しみは実に哀切。ただ、事実描写から少し発想をとばして詩としてのエッセンス添付が欲しかった。二首目の「甦える」は「甦る」だろうか。送り仮名ひとつでも辞書に相談を。

・入院の妻居ぬベットの冷たさよ時々目覚めて触れれば空し

・年明ける畑に立てば春見えて野菜育てる夢駆け巡る

・「老老介護の日々」はタイトル通り、奥様とご自身の病気という事情がよく分か

「老老介護の日々」

棘木 正市



る一連。「眼が見えず遊ばれてんや南京の葉陰で覗くテツカイ胡瓜」の口語遣いに心が滲み、また二首目の明るさも賛成。だが「空し」や一連にあった「悔し」等の感情語は不賛成。そして事情伝達が眼目ではないはず、短歌は。

・その胸に毛糸の帽子抱へたるをみなと出会ひし陽の当たる道 伊澤 信雄  
・鉄腕のアトムふたたび 霧の中の地球を救ふ力の核心

「氣まぐれ」一連の一首目と二十首目が掲出歌だが、この二首の距離感に読者は戸惑う。一連に共通したモチーフが必ずしも必要なわけではないが、やはり二十首という括りで表現したいものがあるべきか。流れや構成を考えるのも歌詠みのたのしみだろう。一連では前半の柔らかな抒情性は魅力だった。

時代を、そして世代を現す

小谷 博泰

「二頭の狼」

大江 美典

・朝まだき厨に一人佇むはけふのあなたに口づける為  
・「おはよう」と呟いてみれば掌でスマホは震えるコマドリのごと

スマホによる情報時代の中で、子育て世代の日常がどのようであるか、ポップな感覚で捉えられていて、新鮮である。時代は変わるといふ思いを強くした。仮名遣いは、この内容なら現代式に統一した方がよさそうである。

「硝子の猫」

山本 圭子

・アンティークの小物あきなふ店先の硝子の猫がわれを呼びゐる  
・むかひあふ少女の胸のペンダント亡き猫の眼と同じ色せり

まだ初老というには早く、あるいは壮年の後半期であろうか。母親をなくして一年近くの穏やかに過ぎて行く日々が、しみじみとして読者の心にも感じられる。ただ、古典的な言い回し部分に評価を迷う作品が二、三ある。

「酒と昭和と子どもとわたし」

高木 晋一

・埃舞う本より落ちし葉にはおさなきむすめの ッパ、だいすきよ  
・雨あがり神社の横の細道に白く色褪せ冥る犬の糞

昭和の思い出を詠んだものであるが、思い出にもかかわらず生き生きとしてリアルで、臨場感があつて読んでいて引き込まれる。ただ、表現上の飛躍に読んでいてついていきにくく感じられる作品が少しあった。

「名物警官」

老月 良一

・遠足に持つていくもの分らずに泣きおり友の作れぬ私  
・父の着る制服いつも洗いたて神棚を拝み会社へと行く

ひ弱そうな幼少年時代を思い出しながら来し方を描いたような作品群である。作者である主人公が人生をややネガティブに見ているようなところがあるが、そのネガティブ感が、読者の心に快く訴えてくるような気もする。

連作構成の統一観と二首の独立性と精確さに自覚的であろう 安藤 直彦

「ぐつ・ちよき・ばあ」

西村 節子

・うつかりが尺取虫に食べられた薔薇の蕾に風車の蕾  
・五本指の靴下にして気を入れりや顔もつれたぐつ・ちよき・ばあ

昨年の作もそうだった印象が強く残っているが、全体的に動的な詠風が新鮮で好ましい。ご高齢ながら素材も豊富で、年齢を感じさせない活動的な生き方が全体の作品によく反映している。一連二十首の構成上の統一観を更に遂げられることを期待したい。

「三人へおくるレクイエム」

尾崎 順子

・わらわらと空き家は空き家と呼ぶような谷深き村 月のぼりゆく  
・地方紙の誕生欄にさきくさの三人の名あり雪降り続く

若くして、あるいは逆縁に逝った三人の男友達への鎮魂歌。「ふるさと」の原風景に触れ、短編小説を読むような味わいがある。連作の場合、それぞれの一首の独立性が問われるところ、前後の歌へのもたれの部分をなくした完成度をこれからに見せて欲しい。

「はるかなり」

内藤みさを

・掛け替える(雪の余呉湖)の匂ひたつイーゼル並べた彼の雪晴れよ  
・はるかなり徴兵検査場にわがあたり否応もなく紅一点と

若き日の戦時の体験を回想しての一連、ありありとして臨場感が伝わりなかなかだ。折角の御作、惜しむらくは表記上のこと。仮名表記の新旧混交「替える」は「替へる」(雪の余呉湖)のへ)がわからない。これは選考上大きなマイナスポイント。

「彰化抄」

眞住 彰

・雨上がり葉先に止まる玉雫小犬駆けぬけ胴ぶるひする  
・海望む丘に來たりて見渡せば綿雲流る故郷の方

全体、身めぐりの囁目を平明に写実して好感度は高い。それだけに読者の表現上の要求度が高くもなる。「乱舞する桜吹雪」「景色は一変」といった慣用表現はしない方がいい。「(萌え)いず」「(出ない)こと(なる)」は「いづ」。こうしたことが惜しまれた。

主題を活かす構成の妙

尾崎 まゆみ

「誕生ー幼児の神ー」

長尾 宏

・チューリングテストを受けるワタシなれ唐突に鳴る、あれは霧笛だ。  
・三首目を「あたたかく」として小主観をあへて挿もうひととなるため

アルファゴ(囲碁対局特化AI)と人間との対局をアルファゴの立場から詠むその視点の斬新さと、構成の妙が際立つ才気あふれる作品は、一首の完成度よりも臨場感を大切にす。荒削りな文体が続き単調になったのが惜しい。

嶋澤 隆

【心念】  
・紅葉が鎮守の杜に吹かれ来て旅する吾の哀愁に触る  
・広島にて金子を紛失せしことの悔やみ隠せず一人の旅に  
独り生きる哀愁を、心念をもつて乗り切ろうとするその心を「吾の哀愁に触る」と触覚を交えながら客観的に言い切ったところが良い。「金子を紛失せしこと」のように状況がくつきりと見える歌がもう少し欲しい。

島田 英樹

【昔かたの古】  
・魂よころしづかに安らげく鎮もりたまへ慈母に抱かれて  
・忘るるはわがころ根の常なれど若き無念の死は忘れ得ず  
昭和二十年八月。鳴門海峡で爆撃を受け遭難した住吉丸乗員を、地元の人々が危険も顧みず船を出して救った実話を、二十首で長歌のように詠み鎮魂の心を閉じ込める。実話への作者の思いがしっかりと伝わる最後の二首が切実。

岸本万由美

【老いの夢と元】  
・冷蔵庫の奥まで整理す年の瀬の衝動買い大半はミステリー  
・捨てたかもしれない一枚探しおりゴミ収集車去りし朝を  
老いの日々を嘆くのではなくちよつぷりユーモアを交えて詠む。心の余裕が感じられるところがいい。たとえば「衝動買い大半はミステリー」、「捨てたかもしれない一枚」。構成をもう少し考えたと主題がしっかりと見えてくる。

平易な言葉で深い内容を

藤岡 成子

【匙加減】

矢野 一代

・ああわれは馬にはあらず鼻先へあの手この手の西洋人参  
・「若葉塾」、デイサービスの「ゆめの家」法定速度にすれ違いたり  
心理的葛藤が主軸の一連。一首目「馬」「鼻先」「西洋人参」と条件を整え内面をうまく引き出している。また二首目のように、一連とは関係のない歌を所々に据えた構成もいい。やや気持ちの全面に出すぎた感がある。

【銀色のコクーン】

多田 真香

・ぽつたりと安産型の君だからきつと私と相性がいい  
・笑うのも泣くのもこれが最後だね銀色のコクーンに抱かれて  
タイトルが魅力的。愛車をコクーン(繭)、また君と表現し、いろいろな角度から詠んでいて若さ溢れる意欲的な一連である。購入から手放すまでの八年間(原因から結果まで)を詠わず絞り込めばもっと良くなる。

【母の声】

高田奈加子

・長病みの母の手洗う湯の中に涙落ちたり細すぎる指  
・歌を詠む己の裏側見るよう何やら恐ろし生きていることが  
母の死を中心にした家族詠で、しみじみとした味わいのある一連。「細すぎる指」「己の裏側」と具体的に描写し説得力がある。全体的に歌が短いのでどこかを平仮名にし、決まり文句を使わない工夫を。

藤本 太子

【あながままに】  
・薔薇よりも菖蒲の花を愛でし娘は十七才の夏急逝す  
・修正のきかざる方へすすむ夫別離れて三年計報届きぬ  
詠まずにはおられない素直な気持が平易な言葉で表現してあり、作者の来し方が如実に見えて心打たれた。二十首で人生を回顧するのはどうしても、誰でも説明的になるので、テーマを絞られることをお勧めする。

2017年度第2回幹事会報告

10月30日、三宮勤労会館  
司会 安藤直彦兵庫県歌人クラブ代表  
◆ふれあいの祭典兵庫短歌祭実行委員会

選考委員会出席者(県・淡路市)  
\*県 (公財) 県芸文協会業務執行理事 大谷 武徳  
事務職 青砥さおり  
\*淡路市 淡路市教育委員会教育部長 新阜 照久  
文化振興部係長 井上 浩二 他1名

兵庫県幹事クラブ幹事27名、幹事外事務局員2名  
・2017年度ふれあいの祭典兵庫短歌祭作品審査  
一般部門(応募総数376首)  
ジュニア部門39校(中学校31校、高等学校8校)、  
応募総数655首 入賞者決定

◆幹事会

・兵庫短歌祭 11月18日(土) 13:00~16:30  
淡路市立サンシャインホール  
実施要領検討 式次第・主催者挨拶・表彰式・選考経過  
作品講評 一般の部(清水昭男・桂保子・中川昭各氏)  
ジュニアの部 尾崎まゆみ氏

・講演「淡路島和歌の路」

\*「兵庫秀歌賞」(仮称)の新設に向けて

『年刊歌集』発行の意義、応募意欲をより高める為に、上記のような賞を来年から設けたらという提案。老いも若きもキャリアを問わず出詠者全員を対象に「一連の秀歌」を顕彰し、讃え、全国に発信するといったものです。選考には種々の工夫、配慮が要られると思われるが、その節には、どうぞよろしくお願ひします。

地区通信

【阪神】8月20日、天王寺にて

「心の花」の松本美穂氏(フランス・リヨン市在住)を迎え「ナツノキ」超結社歌会を開催。田中教子、御手洗靖大

吉野節子各氏他7名出席。▼10月7日、塚口にて未安美保氏(パリ在住の画家・歌人)を迎え「ナツノキ」超結社歌会

開催。田中教子、楠誓英、森垣岳、御手洗靖大、吉野節子各氏他6名出席。(吉野節子)

【西宮】西宮歌人協会は11月1日、85名参加の『年刊歌集』第40集を刊行。▼11月5日、西宮市中央公民館にて第68回西宮市民文化祭、短歌大会を開催(主催・運営西宮歌人協会)。中川昭氏講演「逍空雑感」。(小林幹也)

【神戸】▼6月20日、浮田伸子氏第二歌集『青きほくろ』を上梓。▼6月28日、サンプラザ西館にて神戸芸術文化会運営委員会開催、黒崎由起子氏出席。▼7月6日、サンプラザ西館にて神戸芸術文化会議文芸部会開催、尾崎まゆみ、中川昭、黒崎由起子各氏出席

▼7月16日、生田神社会館にて半どの会文化賞贈呈式開催、土居正氏が受賞。楠田立身、中川昭、浮田伸子、たな

かみち、前田昭子各氏が出席。▼9月3日、姫路市花の北市民広場に文学圏は浮田伸子歌集『青きほくろ』を読む会とお祝いの会開催。▼9月28日、花鏡短歌会吟行会、あわじ花さじき・奇跡の星の植物館へ。31名出席。▼10月16日「第11回灘小学生短歌コンテスト」審査会、灘区役所にて開催。三津野幸代氏審査委員長。応募数1159首。▼11月1日、書道誌「正筆」歌壇欄11月号より三津野幸代氏担当執筆。(黒崎由起子)

【白石】5月19日、明石市柿本神社にて第158回新春季献詠祭を開催。選者楠田立身氏兼題「藤」、競点題「船」。出詠、祭典参列三宅隆子、伊藤敦子各氏。▼5月28日、加古川プラザホテルにて2017年度六甲大会開催。総会・歌会・懇親会。県歌人クラブ新人賞及び奨励賞受賞の鈴木美樹、鈴木裕子両氏に花束贈呈

互選1位(みどり児が両手を空へひらきをり光を掴め風をつかめよ、牧野秀子)。田岡弘子、志方弘子、石原智秋、牧野秀子各氏ら43名出席。▼6月24日、明石ペンクラブ平成29年度の総会開催。作品発表誌『新明石大門』創刊号刊行

27年度に35号で終刊した『明石大門』を踏襲したもの。代表

野瀬昭二氏。▼7月22日、明石ペンクラブ例会にて池本俊六、伊藤敦子各氏短歌合評を担当。▼田岡弘子氏主宰の明石短歌会は、7月作品集『ともしび』33号を刊行。編集は田岡弘子、牧野秀子各氏。(伊藤敦子)

【姫路】6月11日、姫路市民会館にて姫路歌人クラブ短歌大会開催。講演は足立勝蔵氏の「近代短歌の魅力」。作品評は小畑、神保原、久米川、飯田各氏。出詠歌227首。水野美子、小松カヅ子、内海永子氏他80余名出席。大会終了後講師の足立氏を囲み懇親会。(飯田進)

【東播】7月8、22日、茅花短歌会は稲美町ふれあい交流館にて全員の短冊を展示。▼7月12日、短歌会は季刊誌「茅花第184号」発行。▼10月21日、稲美町サークル研修旅行「山陰・鳥取の旅」に茅花短歌会参加。▼10月23日、稲美町天満小学校6年の短歌学習に短歌会の前田昭子、高田道夫、沼田俊郎、西島孝子各氏が指導。▼加古川では「東加古川短歌会」の他に「ふぐるま短歌会」が加古川西公民館にて第3土曜日午前10時から、「短歌クラブ加古川」が第4土曜日午後1時から溝一會館で勉強会。水野美子氏指導

【前田昭子】(前田昭子) 路支社はホテル日航にて、水襲全国大会開催。春日真木子代表他252名参加。▼6月25日、水襲姫路支社は小畑庸子氏藍綬褒章受章を祝う会をキャッスルホテルにて開催。出席者生田よしえ氏他69名

▼7月1日、吉永明代氏(水襲)は「与謝野晶子短歌文学賞・山川登美子記念短歌大会」にて「今野寿美選、伊藤一彦選」に入選。▼8月5日、福崎町文化センターにて山桃忌奉賛第32回短歌祭開催。選歌と選評楠田立身氏。入賞内山嗣隆、岡田恵美子、青田綾子各氏他5名。(生田よしえ)

【北播】6月3日、小野市うるおい交流館エクラにて第9回小野市詩歌文学賞・第28回上田三四二記念小野市短歌フォーラム開催。詩歌文学賞受賞吉川宏志氏(短歌部門)。応募数一般の部1330首。学生部の部6079首。入選者一般の部最優秀一席佐野友子氏(兵庫県川西市)学生部の部最優秀高松輝空翔さん(小野市立市場小二年)他2名。出席者小野市長蓬萊務氏他。選者馬場あき子、永田和宏、宇多喜代子各氏。▼9月16日、コミセンおのにて小野市文芸大会開催。応募数55首。市長賞中

北明子氏(小野市)。出席者小野市教育委員会課長松田祐司氏他。▼10月8日西脇市総合市民センター体育館にて西脇市短歌大会開催。応募数一般137首、学生643首。一般の部特選一席黒田貴美子氏(丹波市)、学生の部特選江頭芽生さん(滝野中2年)、藤原春那さん(東条中3年)、藤原夏実さん(東条中2年)。一般の部選者尾崎まゆみ氏。(芝本政亨)

【西播】9月24日、宍粟市市民短歌会開催。▼10月4日、西播磨短歌祭部会開催。尼子勝義、内海永子、飯田進、安東はつ子、小松カヅ子各氏参加

西播磨短歌祭の選歌、運営について協議。▼10月7日、赤穂市民文化祭短歌会開催。▼10月21日、上郡町民文化祭短歌会開催。▼11月2日、佐用町庁舎にてさよう文化祭短歌大会開催。安藤直彦、新家イサ子、菅原艶子、船引貴明各氏参加。佐用町長賞(雑草と言ふ名の草は無いものを抜きつつ小さき花に手を止む、黒崎文子)。▼11月5日、西播磨短歌祭開催。出詠数は一般182首、学生757首。一般の部県知事賞寺田紘子氏。学生の部西播磨県民局長賞中條優那さん。(尼子勝義、安藤直彦)

【尼子勝義、安藤直彦】

### 平成29年度 兵庫県歌人クラブ 「兵庫短歌賞」「新人賞」作品募集要項

- 資格** 兵庫県歌人クラブ会員及び県下在住・在勤・在学者・他関係者
- 作品** 未発表短歌20首
- 様式** 1. 作品はA4判400字詰め原稿用紙2枚に浄書、右肩を綴じる  
2. 1枚目の欄外に作品表題と新旧仮名遣い別を記入する  
3. 作品表題・氏名・生年月日・郵便番号・住所・電話番号・所属結社名を記入した表紙をつける  
4. 封筒の表に「兵庫短歌賞応募作品」と朱書きする
- 応募料** 2,000円(作品に同封、切手不可)
- 締切** 平成30年2月13日(消印有効)
- 宛先** 〒666-0261 川辺郡猪名川町松尾台4-4-33  
吉野節子方  
兵庫県歌人クラブ「兵庫短歌賞」係
- 選考** 兵庫県歌人クラブ兵庫短歌賞選考委員会
- 発表** 会報第199号紙上
- 表彰** 平成30年4月29日 兵庫県歌人クラブ総会・神戸短歌祭会場  
県民会館11Fパルテホール

※平成25年度より、今までの「新人賞」の呼称を改め、「兵庫短歌賞」とし、その中に「兵庫短歌賞・新人賞・奨励賞」を設け、年度作品によって選考委員会が判断(「該当作無し」の場合もある)することとなっております。「兵庫短歌賞」に向け、既に「新人賞」「奨励賞」受賞者もご応募可です。(問合せ先)679-5322 佐用郡佐用町上石井685 安藤直彦  
TEL0790(85)0021 090-3650-2998

【但馬】11月12日、朝来市大蔵市民会館にて竹柏会「心の花」主催「じろはつたんの里」歌会。▼11月18日、城崎温泉リバーサイドホテルにて但丹歌人会「秋の大会」開催。講演「岸野利雄さんの想い出」講師、高橋博子氏。▼11月18日、豊岡市但馬文教府にて「但馬文学のつどい」。(足立勝感)

【淡路】7月15日、洲本図書館にて第36回全淡短歌祭開催。応募数一般の部70首、ジュニア17首(一次選考)。文化協会長賞(光受け夢運ぶときき飛行機を見上げる吾の手にレジ袋 平啓子)。表彰式後「言葉の扱ひ方・練り方」について尾崎まゆみ氏の講義。▼10月3日、年刊歌集『給水塔』第43輯刊行。東浦

短歌会。参加11名、238首。代表片山田佳子氏、編集委員来田務氏▼10月22日、洲本図書館にてふれあい短歌教室開催。台風上陸のため参加3名だったが熱心な学習会。(来田務)

#### 受贈歌集・歌書(兵庫県関係)

- ☆『青き実のピラカンサ』 大地たか子 5月 ながらみ書房  
ピラカンサの米粒ほどの青き実の濡れてしづかなカフエド・モントレ
- ☆『天啓』 前田ひさ子 5月 丹波新聞社  
熱帯夜姑の奏するハーモニカ「月の砂漠」は闇夜に透けり

#### ☆『青きほくら』

浮田伸子 6月 砂子屋書房  
子とわれに青きほくらのある事を思ひ出したり何ゆゑとなく

#### ☆『幸福な時間』

吉村明美 6月 本阿弥書店  
「幸福な場所」とう個展に私が子どもこのころを過ごした世界

#### ☆『岸』

岩尾淳子 6月 ながらみ書房  
岸、それは祖母の名だったあてのなき旅の途中の舟を寄せゆく

#### ☆『ともしび』

明石短歌会作品集33 7月 西村紀子  
「運命だね」と言いしあなたの浮かびきて桜吹雪をひとり浴びる

#### ☆『シャングリラの扉』

小谷博泰 9月 いろの舎  
シャングリラの扉から次の扉へと百年たつたどおり着いたが

#### ☆『高粱畑』

加納百合子 9月 友月書房  
ざつくりと高粱刈られ中国のひろらの空よ過ぎて思へり

#### ☆『水引き草』

谷口君子 9月 大倉印刷  
わが世にて農を終えりと決めし日の入日は谷の田を煌めかす

#### ☆『枇杷の種ひとつ』

山中昌子 10月 本阿弥書店  
母の木の枇杷の種ひとつ娘の庭の隅にこっそり埋めて来た

#### ☆『給水塔』

東浦短歌会 第四十三輯 10月 大木津多代  
老人と呼ばれる歳を迎えたり裸木のごとくまたも生きたし

#### ☆新年懇親会のご案内☆

恒例の新年会を下記の内容で催します。結社を越えて短歌について語り合い、短歌の輪を広げる場といたしたいと願っております。参加ご希望の方は下記、新屋までご連絡下さい。

- 日時** 平成30年1月21日(日) 11:30~14:30 (11:10受付開始)
- 会場** 萬寿殿 TEL078-231-4531  
神戸市中央区中山手通2-20-4  
(生田神社北側中山手通扱い)
- 会費** 6,000円/人(料理・フリードリンク)  
(連絡先) 新屋 修一 TEL 079 (423) 5168

#### 「高嶺」終刊のお知らせ

昭和三年、早川幾忠先生が創始されて以来の「高嶺」は平成三十年第九十巻第一号をもってその歴史を閉ざすことになりました。永年の励ましとお力添えに深く感謝し、ここに報告させていただきます。ありがとうございます。

#### ◇余滴◇

ハブニングの続く編集を皆様の尽力によりのり切れ感謝しています。森嶋